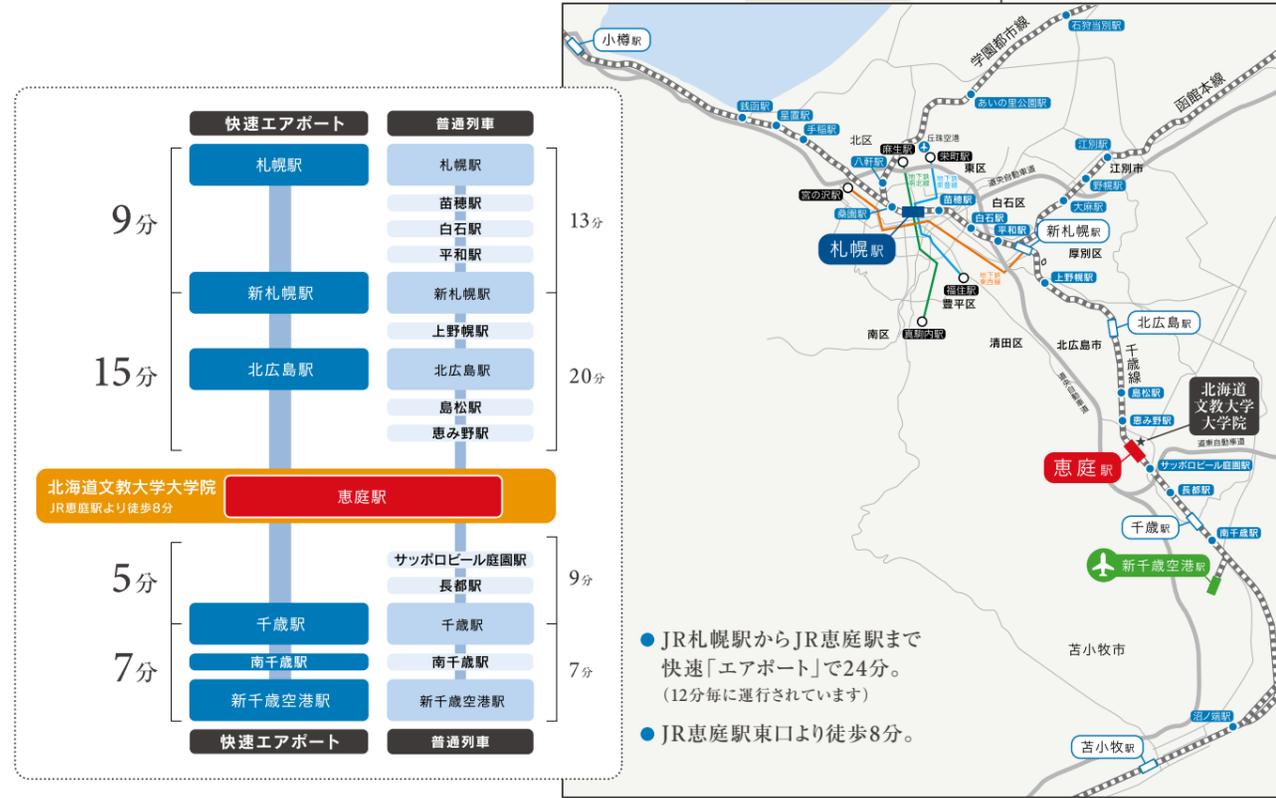


札幌から約30分、新千歳空港から約20分でキャンパスへ。



恵庭市に位置する北海道文教大学大学院へは、JR札幌駅からJR恵庭駅へ乗車24分、JR恵庭駅東口を出て徒歩8分ほどです。新千歳空港直結のJR新千歳空港駅からも、キャンパスまで約20分の近さ。国道36号線（札幌や新千歳空港に通じる幹線道路）や高速道路も間近で、アクセスに恵まれています。

羽田空港 ⇄ 新千歳空港
フライト時間 約1時間30分



北海道文教大学大学院

HOKKAIDO BUNKYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL

2023 募集要項



北海道文教大学大学院

〒061-1449 恵庭市黄金中央5丁目196番地の1
TEL.0123-34-0160 FAX.0123-34-1640



入試広報課では、資料請求をはじめ様々なご相談にお答えします。お気軽にご連絡ください。

入試広報課

入試はここに

入試専用 ☎ 0120-240-552 FAX.0123-34-1640

www.do-bunkyo.ac.jp



- グローバルコミュニケーション研究科修士課程 言語文化コミュニケーション専攻
- 健康栄養科学研究科修士課程 健康栄養科学専攻
- リハビリテーション科学研究科修士課程 リハビリテーション科学専攻
- こども発達学研究科修士課程 こども発達学専攻



北海道文教大学
HBU
HOKKAIDO BUNKYO UNIVERSITY



北海道文教大学大学院
学長
渡部 俊弘

高い専門性を身に着けることを志して
応用的な研究をする人、
専門的な職業人を目指す人材を求めます。

北海道文教大学大学院は、グローバルコミュニケーション研究科、健康栄養科学研究科、リハビリテーション科学研究科、こども発達学研究科まで4研究科からなります。

北海道文教大学の学部教育の柱で「実学重視」その教育にて培われた専門性と広範な知識をさらに拡充し、研究者としての資質を高め、広く地域社会にその才能を有益な形で役立たんとすることを目的として設置したものであります。よって、学部卒業者はもとより、実社会において既に活躍されておられる社会人・各専門家にも広くその門戸を解放し、一層の研鑽を求めています。

専門分野の学びをさらに深化発展させ、グローバルコミュニケーション、食と健康、医療リハビリ、こども発達研究等の各研究分野における理論と実践についての深い知識、優れた人材の育成を目指します。

建学の精神

清 正 進 実

鶴岡学園の建学の精神は創設者鶴岡御夫妻の遺された学訓『清く正しく雄々しく進め』を淵源とする。「清く」とは真理を探究する清新な知性であり、「正しく」とは正義に基づく誠実な倫理性を指し、「雄々しく進め」とは未来を拓く進取の精神の称揚が込められている。また、国民の生活の充実に寄与する「実学の精神」に基づくことが明確に示された。これを要約して「**清正進実**」として心に刻むこととする。

学校法人鶴岡学園

大学院

- グローバルコミュニケーション研究科修士課程
言語文化コミュニケーション専攻
- リハビリテーション科学研究科修士課程
リハビリテーション科学専攻
- 健康栄養科学研究科修士課程
健康栄養科学専攻
- こども発達学研究科修士課程
こども発達学専攻

北海道文教大学

- 人間科学部
 - 健康栄養学科
 - こども発達学科
- 国際学部
 - 国際教養学科
 - 国際コミュニケーション学科
- 医療保健科学部
(2023年4月開設)
 - 看護学科
 - リハビリテーション学科 理学療法専攻 / 作業療法専攻

北海道文教大学附属高等学校

幼保連携型認定こども園 北海道文教大学附属幼稚園

CONTENTS

学長メッセージ・組織図	01	長期履修学生制度について	19
建学の精神	02	出願の流れ・学納金・試験日程	20
■ グローバルコミュニケーション研究科	03	募集要項	21
■ 健康栄養科学研究科	07	研究計画書	25
■ リハビリテーション科学研究科	11	履歴書	26
■ こども発達学研究科	15		

グローバルコミュニケーション研究科 修士課程 言語文化コミュニケーション専攻



グローバルコミュニケーション研究科 修士論文の題目
(過去5年間の優秀な修士論文)

言語文化を究め、持続的共生社会のファシリテーターになる。

実践的で高度なコミュニケーション能力、
幅広い専門知識と豊かな人間性を兼ね備えた
指導的立場で活躍できる人材を養成します。

グローバルコミュニケーション研究科は、言語と文化の専門研究を融合する教育によって、地域社会と国際社会にとって有用な幅広い専門知識と技能を養い、高度な言語運用能力と国際感覚をもって国際社会の中で主体的に行動できる人材を養成します。

「言語文化コミュニケーション専攻」の教育目的

文化と言語の教育課程

本研究科の言語文化コミュニケーション専攻は、日本語および中国語、英語の言語コミュニケーション能力の育成研究を基盤としており、その教育課程は、大きく文化・言語・コミュニケーションの三本立てとなっています。

地域文化から言語を理解

言語の理論研究を行ったり、高度な言語運用技術を身につけるには、言語の背後にある文化を知ることが大切です。本専攻は、日本を含めた中国・英語話者地域圏の文化を国家のなかの国民文化としてではなく地域文化として捉え、人文・社会科学的分野から、その文化の背景、特徴および影響・相互依存のあり方などを研究します。

国際社会で活躍できる人材を養成

多様な文化交流をいろいろな視点から実践的・理論的手法によって理解を深めることにより、国際社会において文化の交流、融合および共生に内側から活躍できる人材を育成します。文化交流に関わる高度な実践研究の能力を備えた日本語教員や日本語および中国語、英語の言語コミュニケーションの実践教育により知識と技術を身につけた、通訳・翻訳業務などで活躍する高度な言語運用能力を備えた職業人を養成します。

Admission Policy

求める学生像

グローバルコミュニケーション研究科は、国際社会の理解に必要な知識・技能を積極的に吸収しようとする向上心にあふれた研究意欲のある次のような学生を受け入れます。

- 【知識・技能】
 - 大学で習得した言語・文化に関する十分な基礎学力を有している人。
- 【思考・判断・表現】
 - 異文化を理解するに当たって柔軟で創造的な思考ができる人。
 - 研究計画について論理的に考察・整理し、分かり易く伝えることができる人。
- 【関心・意欲・態度】
 - 高度な言語運用能力を身につけ、さらに高度な「言語・文化・コミュニケーション」を専門的に研究したい人。
 - 異文化圏に関心を持っている人。
 - 幅広い知識と教養を身につけ、高度な言語運用能力を高め、活躍したいと望んでいる人。
 - 国内外の研究活動を通じて、さらに視野を広めて言語と文化に対する感性を磨き、修了後は翻訳や通訳などに従事する専門的職業人として国内外で活躍したいと望んでいる人。

研究科長からのメッセージ



グローバルコミュニケーション研究科
修士課程
言語文化コミュニケーション専攻
研究科長 教授 岡本 佐智子

言語・文化・コミュニケーションの融合研究は
多様な人々との「対話」と「協働」に貢献しています。

21世紀は国際コラボレーションの時代です。国境を越えて移動する人々はもとより、国外の企業にオンライン勤務するなど、デジタルな空間でも国際協働コミュニケーションが求められています。ビジネスだけでなく、世界のさまざまな国・地域の人々と交流する機会が日常化しています。言語・文化の異なる人々と協働していくためには、AI翻訳・通訳にはできない柔軟で寛容な対人コミュニケーション能力が必要です。交渉し、関係を築いていくためには、生きた外国語能力と専門的な言語知識と文化知識は不可欠です。

言語コミュニケーション研究は、異文化コミュニケーション研究でもあり、価値観や思考、世界観等、多様な人々と対話を通して相互理解を促進していくための学問です。

私たちは、変動するグローバル社会で、人と人をつなぎ、共に成長できるコミュニケーターを養成しています。

主な授業科目の概要 (グローバルコミュニケーション研究科 言語文化コミュニケーション専攻)

科目区分	主な授業科目の名称	講義等の内容(概要)
共通科目(A…必修)	研究方法論A・B	各自の専門領域において深く研究したい問題や事項を論文にまとめ、発表できる能力を身につけるための基礎科目である。論文とは何か、その書き方から引用・参考文献の扱い方までを演習形式で身につけていく。問題提起に始まり、本論の役割(論拠提示から結論、行動提示、論の展開まで)、結びの役割(全体のまとめ、評価、展望提示等)の書き方を基本とし、各自の研究専門領域学会の書式にしたがった論文が書けるようになる。
	特別課題研究I・II	優れた修士論文作成に向かって、専門研究を深め、研究者としての研究倫理および研究姿勢を身につけていくための演習授業である。修士論文完成のための具体的な論文作成指導を行っていくが、院生は学会や研究会等で発表できるように、より論定の明確な論文の書き方を主体的に学んでいく。 論文提出までに修士論文にふさわしい内容と論文作成に必要な資料収集、先行文献精読が備えられ、探究心を持続拡大しながら論文完成に向かう。先行研究を批判的に読むことができ、論文テーマを深め、自律的に研究できるようになることを課する。
共通科目(B…選択)	異文化間コミュニケーション研究I・II	異文化間コミュニケーションの代表的な研究論文(たとえばホフステードやバーンランド、ニシダ等)を批判的に読み、その理論の諸問題に関するディスカッションペーパー作成やプレゼンテーションを行う。文化背景が異なった人と人で行われる非言語メッセージやメディアコミュニケーションも含めた相互作用にも焦点を当て、多様な価値観とその言語行動のコミュニケーションを分析する視点を養っていく。
	国際関係論特別研究I	国際関係論の3つの主要な世界イメージ、すなわち国家と安全保障を中心にみた競争する世界(現実主義)、台頭する社会経済勢力の国境を越える活動を中心にみた協調する世界(自由主義)、そして資本主義と格差を中心にみたゆがんだグローバル市場の世界(マルクス主義)を構成する理論的視座を、事例を交えて学修する。
	国際関係論特別研究II	開発、人権、環境、女性など普遍的な意義を持つ領域において、各国の市民社会が諸課題の認識や危機の発現を契機として、どのように意識変化を起こし社会運動や社会変化につながっていくのかを、ベックのリスク社会論の視点から考察する。対象は必ずしも発展途上国だけではなく格差が拡大する先進国も含まれる。
	地域社会特別研究II	経済躍進の目覚ましい東南アジアにおける多言語・多文化社会の現状を、先行研究文献を熟読し、国ごとにプレゼンテーションしていく。授業では、徹底した英語教育と能力主義、情報活用によってASEANのハブとなったシンガポールの研究事例を中心に、持続的経済発展に欠かせない外国人労働力/移民の受入れと管理の現状と課題をディスカッションし多文化共生とは何かを考えていく。
日本語・日本文化コミュニケーション領域	日本語学特殊研究I	日本語学に関するさまざまなトピック(たとえば「主語・主題」「テンス・アスペクト」など)について、単なる講義だけではなく、受講者が事前に調べてきたり疑問をもったりしたことに基づき、最新の知見を紹介しながら「その先」まで学修できるようにデザインした日本語学の授業である。
	日本語文化特殊演習	日本語や英語・中国語などのことばをひとつひとつ丁寧に観察し分析することにより、印象や個人的感覚ではなく、証拠に基づき、正しく考察を進め、客観的正解にたどり着くという学問的手法を身につけることを目的とした演習授業である。同時に対象言語や言語そのものについての知識と理解も得ることも可能となる。
	日本語教育学研究I	外国語としての日本語を学ぶために、世界の諸言語を学びながら実践的に理解する。具体的にはヨーロッパの言語やアジアの言語、その他各地の言語を初級から学び、日本語(および受講者の母語)との比較を常に行いながら各言語および日本語を理解し、教授する際の知識としてこれらのことを修得する。
	日本語教育学演習I・II	経験の浅い教師を受講対象として、より効果的な日本語教育能力向上を目指し、模擬授業および課外の実習を行う。また、その授業振り返りから教師の課題改善を図っていく。まず、学習者ニーズと学習目的等に合わせた適切なコースデザインが作成できるようになること。そして、実践授業を詳細に振り返りながらアクションリサーチの方法を身につけていくことから始め、効果的な学習支援を考えていく。



授業におけるディスカッション



異分野からの意見も研究の刺激に



授業での院生ディスカスタントのプレゼン



修士論文「中間発表会」

科目区分	主な授業科目の名称	講義等の内容(概要)
英語・英米文化コミュニケーション領域	英語学特殊研究	われわれは日常生活の中でさまざまな現象に取り囲まれているが、一見無秩序に思われる現象にもその背後には秩序、規則性が潜んでいる。ことばに目を転じれば、その背後にもやはり規則性が潜んでいるのである。本授業では、英語という言語に内在している規則性を発見し、明らかにしていくことを目指す。とくに、ことばを科学的に研究する学問である言語学、その一部門である英語学、さらにその中核をなす統語部門に関する理解を深めていく。
	英米言語文化特殊研究	This course makes use of a range of colorful and innovative TED talks to encourage students to explore and discuss some of the most important scientific and cultural topics in today's world. Many of these topics, such as the importance of sleep, the notions of success, personality types, and happiness, our attitudes towards our jobs and careers, and our relationship with technology, can be viewed differently from multiple cultural perspectives. This allows students to first reflect on mainstream Western ways of thinking about these issues before comparing and contrasting those perspectives with their own viewpoints.
	英語教育学特殊研究I・II	本講義では、人々が第二言語をどのように学ぶのかを研究する学問である第二言語習得論について学ぶ。具体的には、第二言語習得論の基本的な概念や主な理論について学び、外国語教育にどのように応用するべきかを考える。また、自分の興味、関心などに応じて、第二言語習得論に関わる論文を選んでまとめ、発表することで当該分野の理解をさらに深める。
	英語文献翻訳実践演習A・B	「英語文献翻訳実践演習A」では英語文献を日本語に翻訳する。まずは文献を正確に読む力を身につける。さらに日英語の違いを検討する。そして最終的にはきちんとした日本語の文章にまとめることができるようになる。「英語文献翻訳実践演習B」では日本語文献を英語に翻訳する。まずは日本語文献の文章を簡潔な日本語の文章に変換する訓練をする。最終的には文法に誤りがなく、十分に意味が通じる英文にまとめることができるようになる。
中国語・中国文化コミュニケーション領域	日中言語文化特殊研究	グローバル化の進行に伴い、異文化間の相互理解と共生が重要な課題となっている。この授業では、異文化間コミュニケーション(intercultural communication)の視点から、日中両国の言語・文化の交流に関する諸問題を考察し、検討する。単に共通点や相違点を見出すのみならず、米国のジャーナリストであるウォルター・リップマンが提起した「ステレオタイプ」という概念を手掛かりに、日中両国の言語・文化交渉の歴史的プロセスを考察する方法も学ぶ。
	中国語文献翻訳実践演習A	本授業は日本語と中国語の翻訳演習を行う。日本語で書かれた文化人や著名人のエッセイ、対談記事などを中国語に翻訳していく。日本語の話し言葉を適切な中国語にするにはどのような補足説明が必要か、日本語の談話構造を踏まえた翻訳技術を考えていく。安易に中国語の話し言葉に翻訳できないため、日本語ならではの含意やわきまえを理解しての翻訳演習となる。
	中国語文献翻訳実践演習B	中国思想に関する文献:中国語で書かれた哲学思想に関する文献を日本語に翻訳する実践演習である。正確な翻訳をするためにはさまざまな専門用語を理解し、その背景にある文化に関する幅広い知識の習得が求められる。授業では徹底的に辞書を引いて直訳をし、その上で、日本語らしい日本語に翻訳し、さらに意識を導入して正確な美しい翻訳に仕上げる。



本研究科院生による公開講座



修士論文最終口頭試験(公開発表会)



文献翻訳の授業風景



授業課題の授業内プレゼン

健康栄養科学研究科 修士課程 健康栄養科学専攻

北海道文教大学大学院健康栄養科学研究科は、「栄養」、「健康」、「身体活動・運動」及び「食の安心安全」をキーワードに健康栄養科学に関する幅広い専門的知識と技術の習得によって、地域や国際社会に指導的立場で貢献できる人材を養成します。

健康栄養科学専攻は、地域的・時代的要求に応え、「栄養」と「身体活動」を基本とした健康増進活動や健康栄養教育の“健康栄養教育学分野”、食事提供現場及び食品・医療関連産業等において、食物アレルギー等の食品の品質や安心安全に関わる“食品安全学分野”に特化した人材を養成することを目的としております。専門応用を究めることを目指す学生には、更に大学院での継続した教育研究が必要であることは言うまでもなく、北海道女子栄養学校設立以来、70余年の長き伝統を有する本学の健康栄養学科を基礎とした特色ある大学院修士課程の開設により、学部で学んだ専門領域知識をさらに継承・発展させることが可能となります。

「健康栄養科学専攻」の教育研究上の理念と目的

健康栄養科学専攻は、鶴岡学園が築いた実学重視の伝統を受け継ぎ、「豊かな人間性」、「健全な社会性」及び「高い専門性」を有する人材を育成するための教育理念を再確認するとともに、新世紀における実学の創成、伝承の拠点として発展するための中・長期的な目標を以下のように定めています。

1.

鶴岡学園は、長い間、北海道の栄養士養成と食文化教育の一翼を担い、その目的は食生活改善及び栄養指導を行うための実践的学問の追求です。本専攻における教育研究の目標は、真摯な研究を通して実学の追求にあることを再確認し、学部教育を基礎として、人に深く関わる健康栄養に関して今日的課題の正確な理解、観察力、分析・評価能力及び表現能力と豊かな人間性を持った健康・栄養のスペシャリストとしての専門性を高めることです。

2.

本学学則に「豊かな人間性を涵養するため幅広い知識を授けるとともに、理論と実践にわたり深く学術的教育と研究を行い、国際社会の一員として、世界の平和と人類の進歩に貢献し得る人材の育成を目的とする」とあり、本専攻は時代が求める幅広い知識と専門性はもとより、国際標準の業務手順にも対応できるようより深化した栄養士や管理栄養士などの教育の確立に努めます。

3.

道央圏における地域社会との連携のために、地域における医療・福祉施設、健康関連団体、教育機関が主催する健康づくり事業及びインターンシップなどの産学官協同事業等を積極的に推進するとともに、地域の住民に生活習慣病などの予防に関する意識を啓発し、日常的に健康増進を積極的に支援し、地域社会との連携を深め、地域の発展に貢献します。

Admission Policy

求める学生像

健康栄養科学研究科は、食品の安全管理に関する高度な専門知識と研究技術を習得する意欲のある学生、または病院・保健センターなど健康教育の最前線や栄養士養成系大学の教育者・研究者として必要な知識・技術を習得する意欲のある次のような学生を受け入れます。

【知識・技能】

- 大学で習得した健康栄養科学に関する十分な基礎学力を有している人。

【思考・判断・表現】

- 研究計画について論理的に考察・整理し、分かり易く伝えることができる人。

【関心・意欲・態度】

- 行政、学校、病院各施設等において健康教育指導、給食等食事提供における食品の安全管理的な知識・技術を身につけたい人。
- 食品産業において、研究開発に従事し、消費者の立場で食品の品質や安全管理などを判断し、解決できる実践的な知識・技術を身につけたい人。
- 栄養士養成系大学の教育者・研究者、特に実験・実習の指導ができる知識・技術を身につけたい人。



健康栄養科学研究科 修士論文の題目

〈平成28年～令和元年度修了者の修士論文〉

北国における冬道歩行の運動特性と転倒予防に関する研究
～積雪路面と無雪路面の路面条件の定量化および歩行の運動生理学的検討～

北国における健康づくり体操の有益性に関する生理学・心理学的効果の検討

各種動物の赤血球膜浸透圧脆弱性におよぼすカルボン酸化合物の影響について
～ラット、モルモット、ウマならびにウシ赤血球を用いての比較検討～

北海道産魚類のアレルゲン性に関する研究

だし汁アレルゲン性に関する研究

北海道における若い女性アスリートの食行動と健康状態に関する研究
～若年女性アスリートの健康管理と食生活改善法の検討～

野菜に含まれる薬剤耐性菌について
～水耕野菜に含まれる耐性菌の分離同定～

野菜に含まれる薬剤耐性菌について
～市販野菜に含まれる耐性菌の分離同定～

魚類アレルギーに関する研究
～魚類アレルゲンの精製および抗原性の比較・検討～

研究科長からのメッセージ



健康栄養科学研究科修士課程
健康栄養科学専攻
研究科長 教授 木村 浩一

健康栄養関連分野をリードする 高度専門職業人を育成します。

1942年に設立された北海道女子栄養学校を発祥とする本学の健康栄養学科を基盤に、2015年4月、健康栄養科学研究科修士課程が発足しました。「健康栄養教育学分野」および「食品安全学分野」の2領域で講義と実験・実習を組み合わせた教育・研究をおこない、健康栄養に関する高度専門職業人を養成します。本研究科では、栄養系の大学卒業者はもとより、それ以外の大卒者、学士の資格をもたない管理栄養士、栄養士などの資格を有する社会人にも門戸を開放しています。世界の明日を見据え、未来を切り拓き、夢の実現をめざす熱意あるみなさんの入学を期待しています。

授業科目の概要 (健康栄養科学研究科 健康栄養科学専攻)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容(概要)
専攻共通科目	健康栄養科学特論	人間の心身の健康維持・増進を目指し、実現のために必要な「食と栄養・健康、運動と健康、食の安全・機能性」に関わる領域に特化した健康栄養科学の理論を各専門分野から広範囲に学ぶ。(オムニバス方式/全15回)
	公衆衛生学特論	生活習慣病の進行予防は、国民の健康寿命を延ばし、生活の質(QOL)の向上を図る上で必要不可欠なものである。この授業では生活習慣病対策の観点から、健康・栄養行政システムを中心に、栄養・食生活改善手法を学び、個別の行動変容につなげるための手法・評価開発・研究の進め方について説明する。
	プレゼンテーション技術演習	研究に対する理解を深め、より高度な知識を得るために、他の研究発表を聞き、自らが研究発表を行うことは研究者としての資質を養う上で重要なもの一つとなっている。また、その場で自らの研究発表を経験することによって、研究者としてだけではなく、一社会人としてのプレゼンテーション能力を高めることができる。(オムニバス方式/全15回)
	学術論文作成法	和文学術誌への論文投稿を想定して研究結果をまとめ、論理的に記述する能力を養うことを目的とする。所属分野の学会などに投稿し、その成果を斯界に公表し、新しい知見や学説を広めることは、科学の進歩にとって極めて重要なことである。そこで、どの分野の論文にも共通する項目の研究の背景、目的、独創性、意義が論文の中に表現されるか、参考例や研究しているテーマを題材として、演習体験を通して講述する。
専門基礎科目	健康体力科学特論	運動処方国際基準に沿って、健康の評価およびリスクの判定、運動負荷試験、疾病および身体状況に応じた運動処方について学ぶ。さらに、運動特性と栄養摂取、スポーツ選手の栄養・食生活についての最新情報を得ながら、サプリメント利用およびドーピングに関する今日的な問題について考察する。
	食行動科学特論	人はどのように食べる仕組みを手に入れ、どのように健康を維持しているのか。楽しみとしての食事から疾病の予防・治療のための食事まで、人が食事に求める意味と機能について考える。調理科学的視点から“おいしさ”を捉え、社会的な要因による食事文化の変容が食行動へ及ぼす影響を理解する。これら食行動に及ぼす多様な要因を考慮し、栄養教育における行動科学理論の選択と関連して考える。(オムニバス方式/全15回)
	健康スポーツ栄養学特論	健康の維持・増進や生活習慣病予防の観点から、健康運動や競技スポーツへの関心が高まっている。本講義では栄養学の基本を押さえ、運動をする上で身体的コンディションをより良好な状態に近づけるための栄養摂取のポイントや栄養教育について学習する。また、学術資料をもととした最新情報および現場での体験等を講述することで、様々なスポーツ実施者(年齢、性別、競技レベルなど)の身体状況、栄養摂取状況、競技特性等を正しく捉え、健康運動を含めたスポーツ栄養サポートに応用可能な知識および実践力を養う。
	食品機能学特論	食品の機能性は一次機能(栄養素としての機能)、二次機能(嗜好性に関する機能)および三次機能(生理作用に関する機能)に分類される。本講義では二次機能および三次機能に着目し、保健機能食品として認可されている食品成分について概説した後、機能性オリゴ糖の開発ならびに基礎的・応用的研究から特定保健用食品として認可されるまでの申請手続きや審査についての過程を幅広く講述する。
	生化学特論	健康の保持・増進には適切な栄養が重要であることは言うまでもなく、栄養素等が生体内でどのような仕組みで体の諸機能を調節しているかを理解する上で、生化学の栄養が重要である。本特論では、①正常時や疾病時の人体の変化におよぼす影響について特に生体内の化学反応を触媒する酵素およびタンパク質の構造と機能について講述する。②分子や細胞のレベルで栄養素と生体成分の代謝とその調節について講述する。
	バイオテクノロジー特論	遺伝子クローニングに用いる核酸関連酵素、クローニングベクター、遺伝子クローニングの方法、遺伝子及び遺伝子産物の検出方法、遺伝子の解析方法など、遺伝子工学の基礎について分子生物学を基軸とする基礎から最先端までのバイオテクノロジーの基礎的知識と技術について習得し、幅広い理解を目指す。また、バイオテクノロジーに関する新しい知見を紹介し、遺伝子工学の今後を展望する。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容(概要)
健康栄養教育学分野 専門科目 食品安全学分野 特別研究	健康教育学特論	心身の健康度水準と食生活および身体活動・運動などのライフスタイルとの関連性を確認し、QOL向上のために行動変容を促す指導方法を考察する。またヘルスプロモーションを積極的に推進するため、気象条件や公共設備などの環境整備状況など地域の特性を踏まえた健康づくりの方策について概説する。さらに、個人の健康状態を把握するための生理的・心理的手法を紹介し、それらの評価に基づいた具体的な健康づくりの指導法について考察する。
	健康教育学特論演習	心身の健康度を評価する手法について文献および生理心理学的実験、フィールド調査により知識と技法を習得する。また身体活動・運動・スポーツを用いた保健指導や健康教室に関連して実際の指導例に関する情報を収集し、現状の課題とより効率的な指導に向けての改善方法について検討する。
	栄養教育学特論	栄養教育は小児や成人、高齢期に至るライフステージに加え、健康状態やライフスタイルの違いなど幅広い対象者に応じる必要がある。これら個々に対応した栄養教育のマネジメントを効果的にすすめるため、対象者の特徴や変容過程を学び、問題の具体的な捉え方や適切な介入方法を講述する。(オムニバス方式/全15回)
	栄養教育学特論演習	生活習慣病の予防・治療のための食事を主とした栄養教育について、文献や実際の介入により知識と技法を習得する。行動科学や栄養カウンセリングの手法を用いる効果的な介入方法を探るべく、文献から理論的な枠組み、研究デザイン、介入プログラム、評価方法と指標などを取り上げ、行動変容への影響要因について検討する。
	食物アレルギー学特論	食物アレルギーは、特に先進国では増加傾向にあるといわれている。また、原因食品も多岐にわたっている。近年、食物アレルギーによるアナフィラキシーが原因で、死亡事故も発生しており、社会的にも問題となっている。本講義では、食物アレルギーの基本、すなわち、定義、症状、検査・診断法、治療法、疫学などを概説する。さらに、最新の研究例をもとに、食物アレルギーの解析法、特性について深く学ぶことにより、社会において、より実践的に食物アレルギーへの対応が可能な知識を習得する。
	食物アレルギー学特論実験	食物アレルギー学特論で習得した知識にもとづいて、食物アレルギー検査、アレルゲン解析などに必要な技術の原理や手法を学ぶ。具体的には、様々な加工食品中に含まれるアレルゲンをELISAキットを用いて測定することにより、特定原材料がどのような加工食品にどのくらい含有しているのかを把握するとともに、ELISA法についての基本技術を習得する。また、抗体(血清)を用いて、ウエスタンブロッティング法、ドットブロッティング法などにより、アレルゲンの解析法を学ぶ。
	食品衛生学特論	食品中には栄養成分以外にも多くの種類の微量化学成分が含有されている。それらの化学物質は、一方では人にとって有用な成分(機能性成分や食品添加物)として機能するが、他方では有害な成分(微生物毒素、自然毒、残留農薬、環境汚染物質等)としても作用する。本講義においては、有害な化学成分のいくつかをとりあげ、それらが発見されるにいたった経緯、化学構造上の特性、生体におよぼす影響やその作用メカニズムおよびそれらを取り巻く現在の状況等について概説する。
	食品衛生学特論実験	食品衛生学特論で得た知識にもとづき、食品の安全性にかかわる生物学的、化学的検査の原理・技術を学ぶ。生物学的検査では食中毒原因菌に着目し、それらの分離培養法および同定法、毒素の検出方法について学ぶ。化学的検査では、食品中の添加物の適正使用の検査、飲料水や米のような身近な食品の安全性および変異原性物質の検査方法などを学ぶ。また、食品の安全性に関わる研究施設を見学し、食の安全がどのように守られているかを体験する。
	健康栄養科学特別総合実験・演習(修士論文)	学位論文における研究テーマの選定、実験、演習、解析、評価、発表を通じて、分析能力と論理的思考の向上を図るとともに問題解決やコミュニケーション能力の醸成を目的として、健康栄養科学に関して、研究の実践、指導を行い、修士論文指導を行う。

リハビリテーション科学研究科 修士課程

リハビリテーション科学専攻

北海道文教大学大学院リハビリテーション科学研究科は、「障害の有無に関わらず、老若男女すべての人々の健康と幸福を実現する社会」を築くため、リハビリテーションと地域の健康支援分野に貢献できる、意欲溢れる優れた人材を養成します。

リハビリテーション分野には、理学療法士や作業療法士、その他の医療職のほか、福祉・心理・教育・スポーツ等の多分野の専門職が関わっています。厚生労働省は施設から地域への流れを一層加速させ、可能な限り住み慣れた地域で、その人らしい暮らしを人生の最期まで続けることを支えるための「地域包括ケアシステム」の構築を、2025年を目標に推進しています。

この施策を背景に、リハビリテーション分野には、「疾病や障害の基本的理解」を深め、「失われた機能の回復」に対処するばかりでなく、「機能が失われる前の予防的な対応」をより一層強めることが求められています。また、住民との連携や多職種の協同によって地域の関係づくりにパワーを発揮する誠実なコミュニケーション力も不可欠であり、日々の研鑽が必須です。

「障害の有無に関わらず、老若男女すべての人々の健康と幸福を実現する社会」を築くため、リハビリテーション科学専攻は理学療法士・作業療法士や、その他の多職種の多様な価値を意見交換し、切磋琢磨することで得られる学術的深化を追求し、ひいては未来に向かう創造的な研究成果を地域社会に広く還元することを目指します。合わせて、国際社会にも開かれた意識を持つ人材の育成を指向しています。

「リハビリテーション科学専攻」の教育研究上の理念と目的

リハビリテーション科学専攻は、鶴岡学園が築いた実学重視の伝統を受け継ぎ、「豊かな人間性」、「健全な社会性」及び「高い専門性」を有する人材を育成するための教育理念を再確認するとともに、質の高いリハビリテーションと地域の健康支援サービスを提供できる人材育成の拠点として発展するために以下のような教育研究上の理念と目的を掲げています。

1.

人に深く関わるリハビリテーションや地域の健康支援に関する今日的な課題の正確な理解、観察力、分析・評価能力及び表現能力と豊かな人間性を持った、リハビリテーション及び地域の健康支援分野のスペシャリストとしての専門性を高めます。

2.

チームアプローチによる質の高いリハビリテーションと地域の健康支援を実現するために、多職種協働を理解し、地域や時代のニーズを的確に把握し幅広い視野で柔軟に対応できる、より深化した理学療法士・作業療法士、その他の多職種の育成のための教育力の向上に努めます。

3.

高い専門性を持って地域の住民に疾患・障害の予防に関する意識を啓発し、日常的な健康支援を積極的に担うことで、地域社会との連携を深めるとともに国際的視野を持ち、地域と世界の発展に貢献します。

Admission Policy

求める学生像

リハビリテーション科学研究科は、リハビリテーション科学を学ぶ強い意欲を持ち、将来リハビリテーションと地域の健康支援分野などの関連領域に貢献したいと考えている次のような人材を受け入れます。

【知識・技能】

- 大学院で学ぶために必要な基礎的学力（リハビリテーションと地域の健康支援に関する知識・技術、論理的思考力、対人コミュニケーション能力、国語・英語力等）を身につけた人。

【思考・判断・表現】

- 研究計画や研究成果について論理的に考察・整理し、分かり易く伝えることができる人。

【関心・意欲・態度】

- リハビリテーション関連領域の専門職に求められる思いやりの心、豊かな感性と深い見識、責任感・継続性を身につけている人。



リハビリテーション科学研究科 これまでに修了した学生の修士論文題目
〈2019～2022年3月修了〉

脳卒中患者における発症時評価からみた歩行自立予測因子の経時的な相互関係について
— 決定木分析を用いて —

人工股関節全置換術後1ヶ月時の自覚的脚長差に関わる各時期の要因
— 剪断波エラストグラフィを用いた評価の試み —

地域在住高齢者の転倒関連自己効力感に関する心身機能と生活状況について

文章の音読による唾液 BDNF 濃度の増加

ACTN-3・ACE 遺伝子多型と最大筋力・筋疲労・筋疲労回復の関連性

二次産業の半導体製造労働者におけるストレス応答ホルモン濃度、血糖値、主観的疲労度の経時変化
— 労働災害事故発生の一次的予防策考案に向けて —

重症心身障害児・者の呼吸器感染症のリスク因子と呼吸機能に影響しストレスが少ないポジショニング

座位リーチ時の肩関節肢位が肩甲骨および体幹屈曲運動に与える影響

課題関連妨害刺激と課題無関連妨害の抑制処理とその神経基盤について
— functional near-infrared spectroscopy (fNIRS) を用いた検討 —

短期間の簡便なマインドフルネス瞑想がゲーミング課題の成績に与える影響

研究科長からのメッセージ



リハビリテーション科学研究科
修士課程
リハビリテーション科学専攻
研究科長 教授 大川 浩子

リハビリテーション及び地域の健康支援分野に関わる多職種の方を募集します。「全ての人の健康と幸福を実現する地域社会」の構築に向けた新しい価値の創造に力を合わせましょう。

本研究科は本学理学療法学科および作業療法学科を基盤とし、社会人学生を主な対象に2017年4月に夜間の大学院として開設しました。2019年から2022年3月までに計10名の修了生を輩出しております。今年度から出願資格を改訂し、リハビリテーションと地域の健康支援分野の研究に意欲のある方々に向けて、広く門戸を開くことにしました。また、コロナ禍より導入したオンライン授業は、通学に時間がかからないため社会人院生にメリットがあり、座学科目の遠隔授業を実施できる大学院として学則を改訂して再出発しています。

地域の人々の健康と幸福の実現を目指すと同時に、国際的視野も持てる人材の育成が理想です。本学では長期履修制度も用意していますので、経済的・時間的に余裕を持って課程を修了できます。熱意のあるみなさんの入学を楽しみにお待ちしております。研究を通して、一緒に「障害の有無に関わらず老若男女すべての人の健康と幸福を実現する社会」を築いていきましょう。

授業科目の概要 (リハビリテーション科学研究科 リハビリテーション科学専攻)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容(概要)
基礎科目	リハビリテーション科学特論	リハビリテーション医療の中核をなす理学療法や作業療法においては近年EBM (evidence based medicine) が強く求められている。このためリハビリテーション医療分野における基礎医学である生理学分野、臨床応用分野及び健康増進分野の最新動向を学修し、リハビリテーション医療や福祉分野における高度専門職業人としての必須の知識と研究方法を理解する。
	公衆衛生学特論	公衆衛生学は健康にとって有害な社会環境要因、ライフスタイルを変化させることにより、人々の健康と生活の質を向上させ疾病を予防することを大きな目標としている。従って、本講義では広く人の健康に関わる社会環境要因の役割と健康や疾病関係について学ぶとともに、国や地域など集団レベルにおける健康上の課題把握と健康障害の予防、健康増進のために必要な知識と考え方、方法論について学修する。特に人々の健康づくりにおいて身体活動・運動が果たす役割とその意義について学び、運動疫学の観点から問題解決の提案を行う。
	研究倫理特論	人を対象とする研究においては、研究対象者(被験者)への適切な配慮ができることが不可欠である。また、昨今、研究不正行為が次々と明らかになり、研究者の社会的信用が危機に瀕している。このような状況の中、すべての研究に従事する者は、研究倫理を身につけることが社会的に求められている。この授業では、人を対象とするリハビリテーション部門の研究に必要な研究倫理について学修する。
	プレゼンテーション技法	自己の研究について専門外の人にもわかるよう、写真、図、表等を用いて視覚的効果のあるプレゼンテーション方法を学修する。また、日本語及び英語によるプレゼンテーションについても経験する。
	保健福祉政策論	わが国の保健福祉政策は、高齢者人口の急増による年金・福祉・医療・介護等の需要が増大する中、今後どのようなサービスを維持するかが大きな課題となっている。この授業では、わが国の社会保障制度改革の方向性や、諸外国の医療・福祉事情、そしてわが国で今後予定されている「地域包括ケアシステム」と、地域リハビリテーションの課題等について理解を深める。
	統計学特論	研究で得られた事象に対してある判断を下すときには、統計学の理論を用いた普遍的な判断基準が必要不可欠である。本講義では統計学の主要概念、基礎理論、医療系科学領域の研究に用いられる統計解析方法について学習する。また、研究課題に適した統計解析方法を選択し、統計解析ソフトを駆使して分析し、結果を正しく解釈する方法を学習する。
	リハビリテーション管理学特論	患者に安全・安心な医療を提供するには、経営の合理性と臨床的な合理性の両立が必要である。このため昨今、医療現場における経営の視点が重要視され、職種に関わらず医療に携わる者は、それぞれの立場で現場の運営を効率的かつ円滑に遂行することが求められている。また、医療の質向上には臨床研究が不可欠であり、研究倫理に関する基本的理解が重要である。そこで効率的な組織運営に不可欠なマネジメントの視点により、医療の質を高めるにはどうしたら良いか、個と集団の関わり、患者中心のチーム医療の重要性、研究者に求められる基本的研究倫理教育等について学ぶ。
専門基礎分野	病態生理学特論	リハビリテーション医学と関連の深い神経系や運動器系などを含む全身諸臓器について、それぞれを構成する細胞・組織の発生からその形態的・機能的特徴について、分子・細胞レベルから組織・臓器レベルまでを学び、各臓器への基礎医学的な理解を深め、それぞれの臓器での各種疾患の病因や病態生理を学習する。さらに機能回復に向けた治療の現状や再生について基礎医学的観点から学習する。
	病態生理学特論演習	病態生理学特論で得た全身諸臓器の主要な疾患の病態生理学的知識に加え、それぞれの疾患の病理組織像(プレパラート、バーチャルスライド、アトラス等)を観察し、基本的な形態学的所見についての理解を深める。
	神経・細胞生理学特論	脳をはじめとする神経細胞による情報伝達・情報処理機構とその生理機構について、分子・細胞レベルから組織・臓器・個体レベルに至るまで幅広く理解し、リハビリテーションによる神経機能回復について神経科学的観点から学修する。
	神経・細胞生理学特論演習	脳をはじめとする神経細胞による情報伝達・情報処理機構とその生理機能を解明する研究手法について、分子・細胞レベルから組織・臓器・個体レベルに至るまで幅広く学修し、その実験技術を修得する。
	身体機能解析学特論	ヒトの運動及び身体機能の解析について、工学的、運動学的な手法を学び、それぞれの特徴を捉える。さらに四肢及び体幹の運動や姿勢制御を含めた身体機能について理解を深め、正常と異常の差異を明らかにする。得られた知見からリハビリテーション領域における臨床応用の基礎を構築する。
	身体機能解析学特論演習	身体機能解析学特論で学んだ知識を基に、工学的、運動学的な解析手法を実際に行い、それぞれの特徴を捉える。さらに任意の課題動作において健康人に対する解析や文献の考察を行い、正常な動作と障害された動作の差異について考察する。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容(概要)
臨床応用分野 専門科目	運動器障害学特論	運動器障害に対するリハビリテーション治療の臨床・研究について理解し、今後の研究について学修する。骨運動と関節運動の正常と異常について理解する。下肢、腰部骨盤帯に関連する機能障害について理解する。
	運動器障害学特論演習	運動器障害に対する評価、治療を実践するための手法であるmanual therapy、exercise therapy、インソール療法について学修する。足部機能障害や動作、パフォーマンス障害に関連する英語論文を系統的に分析し、評価、治療における科学性について学修する。
	神経・発達障害リハビリテーション科学特論	神経障害は対象者の身体構造、心身機能、活動レベル、さらに社会参加など、Quality of life (QOL、生活の質)に大きく影響する。本科目では、神経障害に関わる疾患、症候、評価、治療に関する知識を深め、対象者に貢献できるリハビリテーションの具体的な内容を提案できることを目標に、関連基礎知識から評価治療に関する最新の知見まで幅広い内容を展開する。また、「治らない」とされる神経疾患患者への介入のあるべき姿についても考察する。
	神経・発達障害リハビリテーション科学特論演習	リハビリテーションの対象である脳卒中および神経難病に関する病態生理、障害の評価と運動解析、さらに機能回復に関連するメカニズムについて学ぶ。脳卒中の病態、脳画像診断、身体イメージ再獲得とリハビリテーション、神経難病リハビリテーションに関する最新の知見を学び、これからの神経リハ研究のありかたを考察したい。
	高齢者リハビリテーション学特論	「年齢を重ねること」の意味を医学的・心理学的・社会的側面から考察し、高齢者の生活機能の維持・改善を支援する活動について理解を深めさせる。高齢者の身体機能・日常生活活動に関し、多面的に評価、分析、批評ができるよう、高齢者のニーズの評価・分析の方法、高齢者の身体機能・日常生活活動に関して多面的に評価、分析、高齢者のニーズの評価・分析、高齢者の社会的ネットワークの評価、分析等について概説する。
	高齢者リハビリテーション学特論演習	高齢者の加齢変化に関する国内・外の文献の講読を通して以下の研究方法を学ぶ。 ・高齢者の知能の変化に関する研究論文を分析する。 ・認知症高齢者を取り巻く社会的環境に関する文献講読を通して研究方法を修得する。 ・高齢者のメンタルヘルスに関する研究論文を分析する。
	職業リハビリテーション学特論	障害当事者の生活において、「職業」はリカバリーにかかわる重要な作業である。本特論では、障害当事者に対する生活支援について職業リハビリテーションの側面から学ぶ。特に、近年注目される精神障害、発達障害等の多様な特性を持つ障害当事者の職業リハビリテーションの現状を理解し、課題について考察する。
	職業リハビリテーション学特論演習	職業リハビリテーション特論で学んだ知識を基に、具体的なアセスメントや介入方法について学ぶ。さらには、職業リハビリテーションにおける組織運営やスーパービジョン、人材育成に関して理解を深め、現場管理者に求められるマネジメントスキルを獲得する。
	心身統合健康科学特論	健康回復・増進メカニズムについて、身体と精神の2元論を超えた身心相互連関に焦点を当てつつ、環境と人との相互作用も含めた統合的理解を志向する科目である。人の心身健康に向けたアプローチにおいて踏まえるべき原則について、統合的思考を継続する態度を養成するために必要な文献抄読や議論などを行う。
	心身統合健康科学特論演習	近年、人の健康に向けたさまざまな支援や介入法・治療法が数多く考案され利用されている。これらの方法のうち、心身統合に焦点を当てたアプローチ法のいくつかを取り上げ、これらの治療メカニズムを理解するために必要な文献研究と議論を行う。また、これらのアプローチ法の効果研究に役立つ研究方法を実践的に学修する。
指導研究	リハビリテーション科学特別研究(修士論文)	リハビリテーション科学専攻領域の講義科目・演習を踏まえ、リハビリテーション及び健康支援に関する実践・研究・教育を発展させる研究課題を決定し、その課題に適した研究方法を探求し、実践して論文を作成する。

教育学に関する科目4単位 (PTOT養成施設専任教員要件の一つ)を修得することが可能です。オンライン授業の可能な科目、短期留学制度あり。要相談。

こども発達学研究所 修士課程

こども発達学専攻

北海道文教大学大学院こども発達学研究所は、北海道・東北で唯一、そして全国でも数少ない「子育て・発達支援」をテーマとした大学院です。幼児や児童の発達支援に精通した、高度な実践力を備えた乳幼児教育・学校教育の実践者及び中堅リーダーを養成します。

北海道文教大学こども発達学科が育成してきた人材は、地域社会に貢献する人材です。具体的には、保幼小連携に明るい教育・保育者、特別支援に明るい教育・保育者です。これらをさらに発展させて、将来、保育や教育の現場における中堅のリーダーに求められる3つの力量を養成していきます。すなわち「創意ある実践を実現するための教育研究力」、「乳幼児期と児童期の連続性をふまえた実践力」、そして「多様な特性を有する子どもたちのインクルージョンに関する教育研究力」の養成です。

「こども発達学専攻」が養成する人材の目標

こども発達学専攻は、「多様なニーズを有する幼児・児童の発達支援に精通した、より高度な実践力を備えた幼児教育・学校教育の実践者の育成」を目的としています。この目的を達成するために、3つの力量を併せ持つ中堅リーダーの養成を目標としています。この3つの力量は、院生の希望により、保育重視型、小学校重視型、インクルーシブ教育重視型のそれぞれに特化した実践演習等により深めていきます。

1.

こどもの成長・発達を実現するために、常に理論と実践の往還に学び、創意ある実践展開ができる中堅リーダーの養成～今日の社会における価値観の多様化、家族構成の変化、地域社会の変貌に伴い、こどもの発達の実態、これに伴う多様なニーズに対応し適切な支援、指導、教育を実行するには、従来にも増す高度な実践力が求められます。本専攻ではこれに応えていきます。

2.

乳幼児期・学童期の適性を視野におき実践展開できる教育・保育者の養成～幼児期と学童期の連続性については、「小1プロブレム」など課題があります。発達課題、教育課程、学習形態等について、広い視野を持ち相互の連続性に配慮した実践展開できる力量は、これまで十分には養成されておらず、本専攻ではこれに応えていきます。

3.

多様な特性を有するこどものインクルーシブな教育・支援展開が可能な教育・保育者の養成～乳幼児期の支援・教育の場、学童の学級においても、インクルーシブな状況に対するとまどい、ためらいは少なく、支援、指導力の向上が求められています。本専攻ではこれに応えていきます。

Admission Policy

求める学生像

こども発達学研究所は、幼児期と学童期にかけての教育研究を行うとともに、幼児・児童の発達支援に精通した高度な実践力を備えた幼児教育・学校教育の実践者になりたいと考えている教育・保育をめざす次のような人を学生として受け入れます。(教育・保育系の大学卒業者を原則とするが教育・保育系以外の大学卒業者にも出願を認めます。)

- 【知識・技能】** 大学で習得した保育・教育・発達支援および英語に関する基礎的な学力を有している人。
- 【思考・判断・表現】** 研究計画について論理的に考察・整理し、分かり易く伝えることができる人。
- 【関心・意欲・態度】** こどもの成長・発達を実現するために、理論と実践の往還の中からの学びにより、創意ある実践を展開できる中堅のリーダーとしての教育・保育者をめざす人。
幼児期・学童期の連続性を視野においた実践の展開ができる教育・保育者をめざす人。
一般の子どもたちと障がいのある子どもたちのインクルーシブな教育・支援のできる教育・保育者をめざす人。



こども発達学研究所 修士論文の研究題目

〈令和3年度までの修了生による修士論文〉

学級経営の困難な状況に関する研究
(研究指導担当教員:三上 勝夫 教授)

特別支援学級のあり方についての考察
～T先生からの聞きとりをもとに～
(研究指導担当教員:三上 勝夫 教授)

北海道の教育現場における性教育の現状と課題
—小・中・高等学校の教員への実態・意識調査—
(研究指導担当教員:三上 勝夫 教授)

夫婦間における「子育てに対する考え方」の可視化
(研究指導担当教員:山本 愛子 准教授)

障がい児保育の現状と課題
(研究指導担当教員:小田 進一 教授)

高等学校における教科「福祉」の意義と課題
—総合学科等における教育実践を通して—
(研究指導担当教員:加藤 裕明 教授)

研究科長からのメッセージ



こども発達学研究所修士課程
こども発達学専攻
研究科長 教授 加藤 裕明

幼児教育・発達支援のための高度な実践力を養成します。 幼稚園教諭及び小学校教諭専修免許状取得課程 令和4(2022)年4月新設

本研究科は全国的に見ても数少ない「子育て・発達支援」をキーワードにしたユニークな大学院です。「子育て中の保護者支援にかかわる地域のリーダー」「保育・教育現場において発達支援に携わる中堅のリーダー」「発達臨床実践の先端的研究に取り組む研究者」が一堂に会して、それぞれの立場から「子育て支援について語り合う場」を提供します。また、ここでは「子育て教育地域支援センター(通称文教ペンギンルーム)」が子育て及び発達支援の最新の情報を提供します。これらの取組を通して、地域と学校と大学が「三位一体」となって次世代を担う子どもたちが求めている世界を実践的に探求していきます。

以上の社会的使命に応えるため令和4(2022)年4月より、**幼稚園教諭及び小学校教諭の専修免許状取得課程**を新設しました。

授業科目の概要 (こども発達学専攻)

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容(概要)
※	こども発達支援総論 ※発達支援に関する総論	学校や幼児教育・保育の現場で生起するこども発達支援分野の抱える諸問題を提起し、その解決の手がかりを、①コミュニケーション力の育成、②適切な授業方法及び教育内容の具体化、③子どもの発達とその諸条件を通じて明らかにする。(オムニバス方式/全15回)
	こども発達特論	人間発達に関する諸問題について、発達心理学の研究成果に基づき人間の生涯発達を可能にしている諸要因について議論する。この講義では発達心理学に拘ることなく、人間精神の問題や思想に関して議論している哲学、教育学等の関連分野についても視野を広げながら多角的に人間発達と精神の問題を扱う。これらの研究分野の知見を基礎にして保育、幼児教育、さらには学校教育の現場における実践とその課題について理解を深める。この講義を通して受講生各自の現場実践の重要性と意味を学問的に再確認していくことを最終的な目標とする。
	教育課程・方法特論	幼稚園教育要領及び、学習指導要領の特徴をふまえ、各園各学校におけるカリキュラムのあり方をめぐって、日本における教育課程の変遷やその背後にある編成原理などに触れつつ、実践的な検討を行う。これと関連して、教育方法についても、教育内容を具体化し、子どもの学びの実現をはかるため、いかに適切な授業方法を選択・創造すべきか、具体的な検討を行う。これらの検討は受講者の抱えている具体的な課題にそって行うこととする。
	インクルーシブな教育・保育特論	幼児期・学童期の教育において、多様なニーズを持つこどもへの対応と、インクルーシブな保育と教育の場の構築が課題となってきた。「発達面に課題のあるこども」についての知識を整理しながら、支援を必要としているこどもたちが抱える心理的な課題を明らかにし、インクルーシブな関わりについての理解を深めていく。
実践力の基礎科目群	教育内容・教材特論	教育内容・教材論の今日における深化は、先行研究によれば、教育内容と教材の区別論に始まるとされる。本講義では、この論の批判的吟味を土台として、とくに幼児段階、小学校低学年段階における教育内容・教材のあり方を研究する。教材は、教育内容を具体化し、思考や操作の対象として学習者に提供するものであり、学習を成立させる要件を構成している。ペスタロッチの直観教材、コメニウスの図絵、モンテッソーリの教具など、近代教育実践の当初から、工夫開発がなされてきた。これらを引き継ぎ、今日にいたるまでの教育内容・教材について、すぐれた事例に学び、その成果の要因を理論化し、受講生自身の経験を通じた課題意識を持ちながら、新たな教材開発に向けての課題を明確化する。
	教育方法実践特論	教育実践は教育目標を子ども・家庭・地域社会の実態を考慮して具体化した教育計画のもとで、しかもそのときどきに生起する諸事態に臨機応変に対応しつつ行われるものである。こうした今日の実践論の土台の一つとなったのは、技術的実践と反省的実践の区分と反省的実践を推奨する先行研究であった。このような先行研究の批判的な検証を機軸として、本講義を展開する。本講は、内容の上では、教育とケアの統合、方法原理としての「遊び」、今日の課題である幼小の連携、家庭・地域社会との連携等についての先行事例、先行研究を吟味し、あわせて、受講生自身の経験を通じた課題についても、討論を通して明らかにし、主体的学習を通して教育実践に向けての理論的基礎を構築することとする。
	特別支援教育コーディネーター特論	教育・保育職における特別支援教育は、子どもの権利及び学習・発達を保障していく観点から不可欠なものになっている。本講義では、従来の「特殊教育」から「特別支援教育」への広がりの中で、特別支援教育の一人ひとりの発達に即した支援のあり方が、全ての教育の基底として重要なことを学習し、コーディネーターとしての力量形成の手がかりを研究する。そのために小中学校を事例対象にし、教育相談や個別の配慮を必要とする事例への対処などが実際にはどのように行われているのかを知り、特別支援教育コーディネーターの学校現場での役割の実際を学ぶ。また、過去の事例をもとに、課題解決発展型の取組を有効に進めるために求められる人的な体制の構築や現場環境を有効に活用した対応、保護者対応などを視野に入れて、実際に作成された個別の指導計画に込められた、悩みや願い、具体的な支援の方法について、受講生全員で討論を重ね、特別支援教育コーディネーターとしての資質を高めることを目的とする。さらに、特別支援教育コーディネーターについての研究により得た知見をより実際的な知識へと高めていくために、小中学校への訪問見学を積極的にに行い、持ち寄った教育情報を受講者全員で共有し、必要に応じて学校現場にフィードバックし、実践的な研究を進めていく。
	保護者支援特論	保護者との関係づくりによる個別支援、困難かつ複雑な課題に対する多職種(機関)連携など、さまざまな子どもに対する家庭支援について教育者・保育者が担う役割、現代的課題について教育・保育の専門性を高める視点から学ぶ。特に、発達面に課題がある子どもの保護者が抱える課題について、学校・保育現場はどのように関わってきたか、先達の知見を概観しながら、保護者支援のあり方について理解を深める。
	こども発達支援・臨床相談特論	乳幼児期・児童期の子どもの発達支援の手掛かりとしての心理臨床について学習する。ここでは、特に、発達面に課題のある子どもたちのコミュニケーション力を育成するために本学で開発された「関係力育成プログラム」を中心に、遊戯療法及びカウンセリングの理論と実際を重点的に学ぶことを通して、子どもの発達を支えるための相談・支援のあり方について研究する。
	特別支援教育方法特論	インクルージョンに関する理解の高まりのなかで、幼児期・学童期の教育においても、特別なニーズを持つこどもへの対応とインクルーシブな保育と教育の場の構築が喫緊の課題となってきた。この課題に応えるために、教育課程のなかにインクルーシブな保育と教育を視野に入れた特別支援教育科目群を配置している。特別支援教育方法特論はこれらの講義の中核を占める課目として位置づけられている。本科目では、障害を構成している諸要因について、発達論的かつ関係論的に捉えていく中で、理解を深めることを目的とする。

科目区分	授業科目の名称	講義等の内容(概要)
こども発達支援教育関連演習科目	こども発達特別演習	人間発達の研究について発達心理学、教育心理学の心理学分野に加えて、人間精神の問題を論じている関連分野の内外の知見に関して重要文献を読み解いていく。この講義で扱う知見はピアジェ、ヴィゴツキーの二大発達理論、ワロンの発達論、現象学のメルロ＝ポンティの人間精神の生成論、ドゥルーズの差異と反復論、意味の生成論、そして西田幾多郎、三木清、木村素衛、城戸幡太郎の各思想などである。これらの主要論文を取り上げ、演習形式で議論する。尚、「こども発達特論」の講義内容と関連づけながら必要な文献を選択していく。
	教育課程・方法特別演習	今日の日本における教育課程論・教育方法論の成果を概括する。「学力」「学び」「評価」などに関する今日的な課題について、文献研究や先行実践の学習を土台にしなが、学校現場において遭遇する現実的な問題、例えば、受験学力と新しい学力観、教科学習と総合学習、評価と指導要録などを取り上げ、解決の方途を検討する。受講者自らが解決のためのプランを作成し、試行することを通して知見が得られるよう配慮する。
	教育内容・教材特別演習	教育内容・教材特論において得た知見を土台として、本演習では、より具体的、実践的な研究を展開する。教育内容・教材の開発においては、今日、教育内容をいかに具体化するかの道筋と特定の素材がいかなる教育内容にふさわしいかを見出す道筋、あるいはそれらを総合した道筋などの多様な方法が提案されているが、これらの先行研究と事例に学び、受講者にはいくつかの課題について、具体的な教材の作成を課す。受講生自身の経験を通じた課題意識を最大限に生かし、課題についての遂行過程及び成果をもとに、教育内容・教材研究に関する意欲を喚起し、力量を養うものとする。
	教育方法実践特別演習	幼児教育実践についての教育実践方法論の成果をもとに、本演習では、より具体的に実践現場における課題を抽出し、その性格・特徴を明らかにするとともに、解決に向けていかなる方策があり得るかを研究する。教育実践は、実践を展開するうえで諸環境の調整、組織者のリーダーシップの発揮、実践者相互の関係性の構築、保護者・地域社会との連携等を研究と事例を検討し、諸課題の解決もこうした実践の全体像に位置づけられて可能となることを明らかにする。ここでは、受講生が演習へ積極的に参加できる環境を提供し、大学院生が受講生相互の経験を通じた経験知を提示しあうことを含めて、重層化した理解を深める演習を展開する。
	発達障害実践特別演習	実践的教育・研究の指導を通じて、今日の幼児期・学童期の教育・保育の現場において求められる「多様なニーズを有する幼児・児童の発達支援に精通した、より高度な実践力を備えた幼児教育・学校教育の実践者を養成」するために、社会人を含めた大学院生自身の経験を通して課題を分析する。受講生が持ち合わせている知見を相互に出し合いながら、発達障害の課題を抱えている子どもたちの支援(教育)のあり方を考えていく。
	こども発達支援・臨床相談特別演習	発達面に課題のある子どもたちへの支援・相談について、理論学習および体験実習を通して実践的に学ぶ。ここでは、主として、本学の子育て教育地域支援センター(文教ペンギンルーム)をベースにして、①集団遊戯療法としての「関係力育成プログラム(文教ペンギンメソッド)」によるロールプレイ体験および支援場面の振り返りのためのビデオ記録によるクリッカー分析、②子どもを取り巻く家族関係への支援のための「FIT(Family Image Test)」,③子どもの特性を把握のための発達・心理検査の学習などを中心に、受講生の体験も交えながら学びを深める。
	気になる子どもの発達支援特別演習	幼児期・学童期の教育において、多様なニーズを持つこどもへの対応と、インクルーシブな保育と教育の場の構築が課題となってきた。学校や保育現場で起こる、こども発達支援分野の抱える諸問題を提起し、具体的な実践と関わらせながら、特性に応じた支援に関する学びを深めていく。
	発達支援分析評価法実践演習	発達支援に関するクリッカーを活用した分析・評価法について実践的に学ぶ。ここでは、実際に、発達面に課題のある子どもたちの集団遊戯療法として開発された「関係力育成プログラム(文教ペンギンメソッド)」によるロールプレイ実習および臨床体験実習を行い、実習後に、自分たちの実習場面の映像について、反応収集提示装置「クリッカー(PF-NOTE)」を用いた分析を通して振り返りを行う。また、このことを通じて、次に続くこども発達学実践演習及びこども発達学特別研究を有効に進めるための視点の設定の仕方について学習する。
	こども発達学実践演習Ⅰ	本学の子育て教育地域支援センター(文教ペンギンルーム)をベースにして進められる。ここでは、主として、就学前の地域の子どもと保護者に対する、発達支援の取組に陪同しながら、①発達支援対象の子どもと保護者の実際の支援を進める上で必要とされる情報の収集(発達・心理検査の情報を含む)と支援計画の立案の検討作業への参画、②本学で開発した関係力育成プログラム(文教ペンギンメソッド)をベースにした発達支援活動への参加、③ケースレポートの作成、を通して、「場を通じた支援のあり方」について実践的に学習する。これらの学習の成果は、次に続く、修士論文の作成のための基礎資料として有効に活用できるようにしていく。
	こども発達学実践演習Ⅱ	附属子ども園及び協力保育施設をベースにして進められる。本演習の目的は、乳幼児期の教育における教育内容を高める教育・保育の要件とその評価法を開発できる力量を形成することにある。ここでは、特に、実践的臨床的観点から、保育場を考察していく力を身につけることを目標にする。そのための資料として、保育場面で収集された子ども同士や保育者と子どもとのやり取りのエピソードや保育者の保育実践に関する「語り」の資料を通して、ありありと対象の子どもの実像が浮かび上がるような評価資料の収集の仕方を研究していく。さらに、模擬保育を計画し、これまでに学習してきた知識を経験に裏付けられた知識として深めていく。
こども発達学実践演習Ⅲ	本演習は、主として、協力小学校をフィールドとして実施される。ここでは、授業を教員と学習者の相互作用としての教授学習課程として捉え、小学校における将来のミドルリーダーとしての資質を培うという視点から、模擬授業、研究授業等の実際場面をビデオ映像記録として収集し、クリッカーを活用して、特徴的場面を分析し、それらの授業計画の立案の検討作業を用いて、重点的に振り返りをおこなう。クリッカー分析視点の設定は、教材内容と学習課題、学習活動の設定、教師の発問系列・構成等から、あらかじめ絞り込みをし、可視化資料(グラフと対応した授業場面の映像)を作成する。これらの分析資料を、受講者を中心にして、実務家教員、研究者教員で一堂に会して振り返りをし、教師としての授業分析力を高める手がかりを発見していく。	
研究指導	こども発達学特別研究Ⅰ	こども発達学実践演習での取組で得た経験に裏付けられた知識を、さらに深める学習の流れのなかで、こども発達学特別研究Ⅰが位置づけられる。ここでは、各自が「こども発達学実践演習」の実践的学習のなかで生まれてきた「こども発達学に関するテーマ」の明確化に学習活動の中心がおかれる。具体的には、研究課題に関連する検討を、主指導教員のもとで行う。さらに、主指導教員のもとで、各自の課題意識に応じて研究課題を確定し、先行研究論文及び関連研究論文を収集し、研究テーマの明細度をあげる。
	こども発達学特別研究Ⅱ	中間報告に向けて、自己設定した「研究計画」に基づいた課題設定の進行状況を準備する。具体的には、研究計画に基づいた予備調査、本調査、アクションリサーチ等により収集された資料を、分析の視点、方法を明確にしなが分析・整理を進め、さらに、理論的検討を加えながら、考察を深めて中間発表のための準備を進める。
	こども発達学特別研究Ⅲ	中間報告を通して明らかになった課題の修正を行い、修士論文の到達点を明確にする。さらに、研究課題についての理論構築を図り、論文構成を洗練させて、修士論文の完成を目指す。

大学院長期履修学生制度について

北海道文教大学大学院では長期履修学生制度を導入しています。

長期履修学生制度とは

長期履修学生制度とは、学生が職業を有している等の事情により、標準修業年限（修士課程2年）を超えて一定期間にわたり計画的に教育課程を履修し修了することを希望する場合に、その計画的な履修を認める制度です。

具体的には、2年間で修了するためには1週につき数回の登校が必要となることを、3年または4年計画で1週当たりの登校回数を減らして計画的に履修し、仕事との両立を図りながら修了を目指すことができます。

※注：長期履修学生制度は、単位の修得状況や学位論文の審査過程により修了が延期（いわゆる留年）となる者を救済する制度ではありません。

対象者

- ・職業を有している者（自営業、臨時雇用、非常勤職員等を含みます）
- ・家事、育児、介護等に従事している者
- ・上記の条件に準ずると認められる者

申請方法

- 申請にあたっては入学予定研究科の指導教員に相談し、承諾を得たうえで下記書類を研究科長に提出してください。
- ・長期履修申請書（別紙様式1）
 - ・在職証明書または在職が確認できる書類（職業を有している場合）
 - ・家事従事、育児または介護等に従事している者の申立書（様式任意）

長期履修期間

在学年限（修士課程4年）の範囲内で、長期履修期間を定めることができます。

ただし、休学の期間は上記期間に含まれません。

学費及び長期履修申請書の提出期限

	入学予定者（入学前）	※在学生（入学後）
学費	標準修業年限分の学費を長期履修期間に応じて分割納付していただけます。	出願時に申請した場合は標準修業年限分の金額ですが、入学後に長期履修申請すると金額が変わります。
長期履修申請書の提出期限	入学手続き時	1年次の2月末まで ※在学生のうち最終年次（修士課程2年目）に在学する者は申請することができません。

※ご不明な点は入試広報課までお問い合わせください。

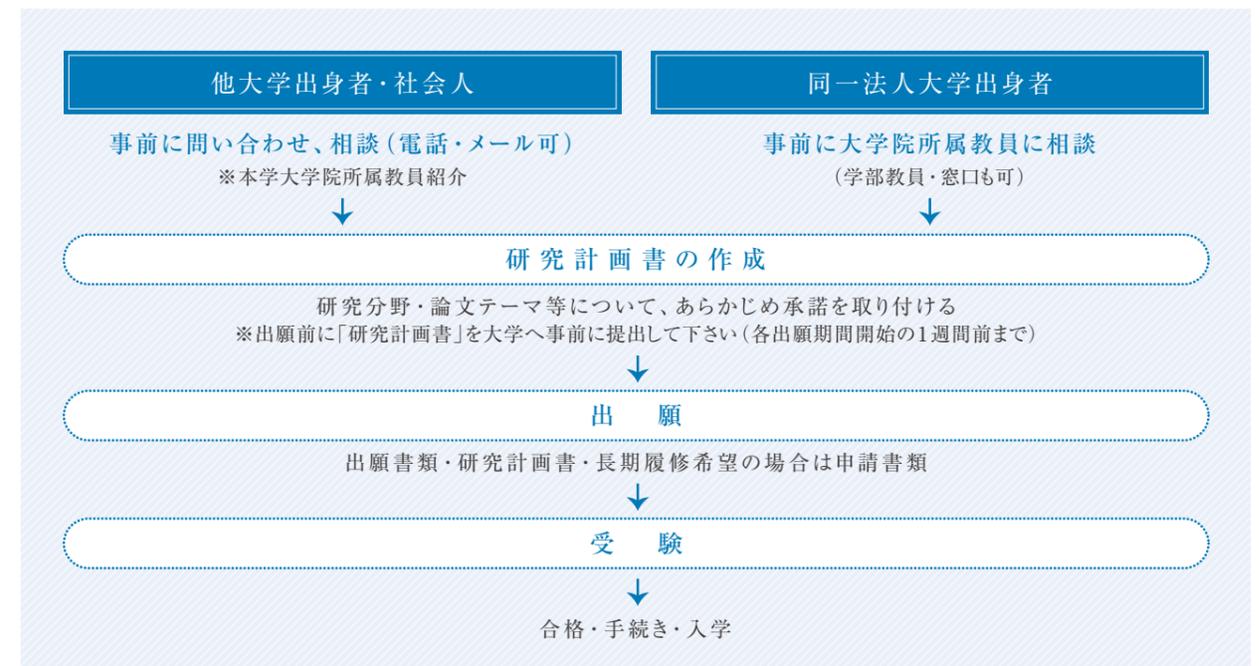
身体等に障がいのある入学志願者との事前相談について

本学への入学志願者で、次に該当する場合（学校教育法施行令第22条の3に準拠）は、受験上及び修学上の配慮が必要となることがありますので、必ず本学入試広報課に電話等で、各入学試験の願書受付日の10日前までにお問い合わせください。必要に応じ、本学において、入学志願者との事前面談を行うことがあります。

- (ア) 両眼の矯正視力が0.3未満の者又は視力以外の視機能障害が高度の者のうち、拡大鏡等の使用によっても通常の文字、図形等の視覚による認識が不可能又は著しく困難な程度の者
- (イ) 両耳の聴力レベルが60デシベル以上の者のうち、補聴器等の使用によっても通常の話し声を解することが不可能又は著しく困難な程度の者
- (ウ) 肢体（上肢・体幹・下肢）不自由の状態により、立位もしくは座位の保持又は歩行することが不可能又は困難な者
- (エ) 肢体（上肢・体幹・下肢）不自由の状態により、筆記又は実験・実習をすることが不可能又は困難な者
- (オ) 慢性の呼吸器、心臓、腎臓疾患等の状態が継続して医療・生活規制を必要とする程度の者又はこれに準ずる者
- (カ) 身体虚弱の状態が継続して生活規制を必要とする程度の者
- (キ) 上記以外で、受験上、修学上特別の配慮を必要とする程度の機能障害を有する者

問い合わせ先 〒061-1449 恵庭市黄金中央5丁目196番地の1 北海道文教大学入試広報課 電話0123-34-0160

問い合わせから出願・試験、入学への流れ



学費等納付金

区分	グローバルコミュニケーション		健康栄養科学		リハビリテーション科学		こども発達学	
	前期 （入学手続き時）	後期	前期 （入学手続き時）	後期	前期 （入学手続き時）	後期	前期 （入学手続き時）	後期
入 学 料	100,000円	-	100,000円	-	200,000円	-	200,000円	-
授 業 料	350,000円	350,000円	350,000円	350,000円	400,000円	400,000円	400,000円	400,000円
教育充実費	100,000円	-	100,000円	-	-	-	-	-
実験実習費	-	-	100,000円	-	-	-	-	-
学生教育研究災害傷害保険 （2年間分）	1,750円	-	1,750円	-	1,790円	-	1,750円	-
学研災付帯賠償責任保険 （2年間分）	680円	-	680円	-	1,000円	-	680円	-
計	552,430円	350,000円	652,430円	350,000円	602,790円	400,000円	602,430円	400,000円
年間納入額	902,430円		1,002,430円		1,002,790円		1,002,430円	

※本大学卒業生は入学科、実験実習費は免除、授業料は40%減免されます。
本学短大（栄養短大含む）卒業生は授業料が40%減免されます。
外国人留学生は授業料が40%減免されます。ただし、本大学卒業生の減免と外国人留学生の減免は併用することはできません。

入学試験日程（2023年度）〈春季入学は全研究科共通〉

期	出願期間	試験日	合格発表日	手続締切日	
春季入学	前期	2022年 8月29日（月）～ 9月 2日（金）	9月 9日（金）	9月24日（土）	2023年 1月 5日（木）
	中期	2022年 11月18日（金）～ 12月 5日（月）	12月14日（水）	12月24日（土）	2023年 1月 5日（木）
	後期	2023年 2月20日（月）～ 3月 2日（木）	3月 9日（木）	3月17日（金）	3月24日（金）
秋季入学（※）	2023年 6月15日（木）～ 6月30日（金）	7月12日（水）	7月21日（金）	8月 4日（金）	

※グローバルコミュニケーション研究科のみ対象

募集要項

グローバルコミュニケーション研究科

募集する研究科・専攻(課程)・修業年限・募集人員

- 研究科 / グローバルコミュニケーション研究科
- 専攻 / 言語文化コミュニケーション専攻(修士課程)
- 修業年限 / 2年
- 募集人員 / 前・中期合わせて3名、後期2名、秋季若干名
(一般選抜・社会人選抜・外国人留学生特別選抜を含む)

出願資格

- 大学を卒業した者
- 大学改革支援・学位授与機構から学士の学位を授与された者
- 外国において学校教育における16年の課程を修了した者
- 外国の学校が行う通信教育を我が国において履修することにより当該国の16年の課程を修了した者
- 日本国において、外国の大学相当として指定した外国の課程(文部科学大臣指定の外国大学日本校)を修了した者
- 指定された専修学校の専門課程(文部科学大臣指定)を修了した者
- 本大学院において、個別の入学資格審査により認められた者
- 社会人については、前各号の一つに該当するほか、
a) 大学卒業後2年以上勤務し、入学後も同一勤務機関での身分を有する者
b) 25歳以上で2年以上の社会経験を有する者

出願書類

出願前に「研究計画書(本学所定様式1)」を大学へ事前に提出してください。研究内容を審査し、指導可能と判断された場合のみ出願できます(各出願期間開始の1週間前まで)。

- 入学志願書……………本学所定様式
- 研究計画書……………本学所定様式1
- 履歴書……………本学所定様式2
- 大学卒業(見込)証明書
- 大学成績証明書
- 在職中の勤務内容等を記載した書類(社会人のみ)……………本学所定様式4
- 所属長の承諾書(社会人のみ)
- 住所シール
- その他(中国語能力認定証明書等の写し)

※外国人留学生志願者は、前記以外に提出する書類がある他、事前審査を行いますので、出願前に入試広報課までお問い合わせください。

※出願書類については、入試広報課までお問い合わせください。

出願先

- 出願先 / 〒061-1449 北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1
北海道文教大学大学院 入試広報課
TEL. 0123-34-0160

※出願は郵送のみとし、書留速達で送付(締切日必着)

入学検定料及び納入方法

- 入学検定料 / 30,000円
- 納入方法 / 1) 銀行振込「電信扱」で納入してください。
2) 本学所定の入学志願書(必要事項を記入)に入学検定料を添えて、「電信扱」が利用できる金融機関(郵便局は不可)で手続きしてください。
3) 納入後、入学志願書(1、2、4票)の検定料領収印欄に金融機関領収印が押してあることを確認し、出願してください。ただし、4票(領収書)は“本人保管”なので提出する必要はありません。

選考方法

春季・秋季入試ともに筆記試験・口述試験・研究計画書を総合して判定する。各選抜の言語及び文化の科目については、いずれか一つを選択とする。

■一般選抜

区分	科目名			試験時間	配点
※言語・文化	英語	中国語	日本語学	60分	100
	英語圏文化	中国語圏文化	日本文化		
口述試験	口述試験				

※「言語・文化」は、1科目を選択。英語・中国語は辞書持込み可、ただし電子辞書は不可。

■社会人選抜

(出願時において25歳以上で、大学卒業後2年以上の社会経験を有する者を対象とする。)

区分	科目名	試験時間	配点
小論文	小論文	60分	100
口述試験	口述試験		

■外国人留学生特別選抜

区分	科目名	試験時間	配点
外国語	日本語	60分	100
口述試験	口述試験		

- ① 試験開始時刻 / 午前10時00分から
- ② 試験会場 / 北海道文教大学大学院(北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1)

合格発表

本人宛速達郵便で、合格者には合格通知書及び入学手続き関連書類を、不合格者には不合格通知書を送付します。

健康栄養科学研究科

募集する研究科・専攻(課程)・修業年限・募集人員

- 研究科 / 健康栄養科学研究科
- 専攻 / 健康栄養科学専攻(修士課程)
- 修業年限 / 2年、長期履修を希望する場合は4年以内
- 募集人員 / 前・中期合わせて3名、後期1名
(一般選抜・社会人選抜を含む)

出願資格

- 大学を卒業した者
- 大学改革支援・学位授与機構により学士の学位を授与された者
- 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者
- 外国の学校が行う通信教育を我が国において履修することにより当該国の16年の課程を修了した者
- 日本国において、外国の大学相当として指定した外国の課程(文部科学大臣指定の外国大学日本校)を修了した者
- 指定された専修学校の専門課程(文部科学大臣指定)を修了した者
- 本大学院において個別の入学資格審査により認められた者
- 社会人については、前各号の一つに該当するほか別途定める職歴または実務経験を有する者

出願書類

出願にあたり最終学歴が短大卒等、個別の入学資格審査が必要となる者は、資格審査に必要な書類の提出がありますので、事前に下記入試広報課までご連絡願います(各出願期間開始の1週間前まで)。

- 入学志願書……………本学所定様式
- 研究計画書……………本学所定様式1
- 履歴書……………本学所定様式2
- 大学卒業(見込)証明書
- 大学成績証明書
- 在職中の勤務内容等を記載した書類(社会人のみ)……………本学所定様式4
- 住所シール

※出願書類については、入試広報課までお問い合わせください。

出願先

- 出願先 / 〒061-1449 北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1
北海道文教大学大学院 入試広報課
TEL. 0123-34-0160

※出願は郵送のみとし、書留速達で送付(締切日必着)

入学検定料及び納入方法

- 入学検定料 / 30,000円
- 納入方法 / 1) 銀行振込「電信扱」で納入してください。
2) 本学所定の入学志願書(必要事項を記入)に入学検定料を添えて、「電信扱」が利用できる金融機関(郵便局は不可)で手続きしてください。
3) 納入後、入学志願書(1、2、4票)の検定料領収印欄に金融機関領収印が押してあることを確認し、出願してください。ただし、4票(領収書)は“本人保管”なので提出する必要はありません。

選考方法

筆記試験(専門科目、英語各1科目)及び口述試験により判定します。

10:00～11:00	11:20～12:20	13:00～
専門科目 (次の科目から1科目を選択し、受験票に記す) ・健康教育科学 ・食品機能学 ・免疫学 ・生化学 ・生理学	英語 (辞書持込可、 但し電子辞書は不可)	口述試験

- ① 試験開始時刻 / 午前10時00分から
- ② 試験会場 / 北海道文教大学大学院(北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1)

合格発表

本人宛速達郵便で、合格者には合格通知書及び入学手続き関連書類を、不合格者には不合格通知書を送付します。

募集要項

リハビリテーション科学研究科

募集する研究科・専攻(課程)・修業年限・募集人員

- 研究科 / リハビリテーション科学研究科
- 専攻 / リハビリテーション科学専攻(修士課程)
- 修業年限 / 2年、長期履修を希望する場合は4年以内
- 募集人員 / 前・中期合わせて3名、後期1名(計4名)
(一般選抜・社会人選抜を含む)

出願資格

本専攻に入学できる者は、リハビリテーションや地域の健康支援に関する研究に興味を持ち、次の各号の一つに該当する者、または入学年度の4月1日までに該当見込みの者とする。

- 大学を卒業した者
- 大学改革支援・学位授与機構により学士の学位を授与された者
- 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者
- 外国の学校が行う通信教育を我が国において履修することにより、当該国の16年の課程を修了した者
- 日本国において、外国の大学相当として指定した外国の課程(文部科学大臣指定の外国大学日本校)を修了した者
- 指定された専修学校の専門課程(文部科学大臣指定)を修了した者
- 本大学院において個別の入学資格審査により認められた者
- 社会人については、前各号の一つに該当するほか、本研究科委員会が承認するリハビリテーション関連の資格(医療・福祉・心理・教育・スポーツ等)を保持し、一定の実務経験を有する者

出願書類

出願前に入学後の研究等について志望する専門分野の教員と研究計画、出願資格の有無、実務経験等について十分な相談を行うこと(各出願期間開始の1週間前まで)。

- 入学志願書……………本学所定様式
- 研究計画書……………本学所定様式1
- 履歴書……………本学所定様式2
- 大学卒業(見込)証明書
- 大学成績証明書
- 在職中の勤務内容等を記載した書類(社会人のみ)……………本学所定様式4
- 住所シール

※出願書類については、入試広報課までお問い合わせください。

出願先

- 出願先 / 〒061-1449 北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1
北海道文教大学大学院 入試広報課
TEL. 0123-34-0160

※出願は郵送のみとし、書留速達で送付(締切日必着)

入学検定料及び納入方法

- 入学検定料 / 30,000円
- 納入方法 / 1) 銀行振込「電信扱」で納入してください。
2) 本学所定の入学志願書(必要事項を記入)に入学検定料を添えて、「電信扱」が利用できる金融機関(郵便局は不可)で手続きしてください。
3) 納入後、入学志願書(1、2、4票)の検定料領収印欄に金融機関領収印が押してあることを確認し、出願してください。ただし、4票(領収書)は“本人保管”なので提出する必要はありません。

選考方法

筆記試験(英語、小論文)と口述試験により判定します。

- 英語: 60分(辞書持ち込み可、ただし電子辞書は不可)
- 小論文: 健康、医療、福祉、リハビリテーションに関する内容(1,200字 60分)
- 口述試験: 提出された研究計画書に基づき実施します。

- ① 試験開始時刻 / 午前10時00分から
- ② 試験会場 / 北海道文教大学大学院(北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1)

合格発表

本人宛速達郵便で、合格者には合格通知書及び入学手続き関連書類を、不合格者には不合格通知書を送付します。

こども発達学研究所

募集する研究科・専攻(課程)・修業年限・募集人員

- 研究科 / こども発達学研究所
- 専攻 / こども発達学専攻(修士課程)
- 修業年限 / 2年、長期履修を希望する場合は4年以内
- 募集人員 / 4名(一般選抜・社会人選抜を含む、前・中期合わせて3名、後期若干名)

出願資格

入学年度の4月1日において、次の各号に掲げる要件のいずれかに該当する者とする。アドミッションポリシーに基づき、入学者は保育・教育系の大学卒業者を原則とするが保育・教育系以外の大学卒業者にも出願を認めることとする。

- 大学を卒業した者
- 大学改革支援・学位授与機構により学士の学位を授与された者
- 外国において、学校教育における16年の課程を修了した者
- 外国の学校が行う通信教育を我が国において履修することにより当該国の16年の課程を修了した者
- 日本国において、外国の大学相当として指定した外国の課程(文部科学大臣指定の外国大学日本校)を修了した者
- 指定された専修学校の専門課程(文部科学大臣指定)を修了した者
- 本大学院において個別の入学資格審査により認められた者
- 社会人については、前各号の一つに該当するほか別途定める職歴または実務経験を有する者(短期大学・専門学校卒業者は3年以上の実務経験、大学卒業者は1年以上の実務経験を有する者)

出願書類

出願前に入学後の研究等について志望する専門分野の教員と研究計画、出願資格の有無、実務経験について十分な相談を行うこと(各出願期間開始の1週間前まで)。

- 入学志願書……………本学所定様式
- 研究計画書……………本学所定様式1
- 履歴書……………本学所定様式2
- 大学卒業(見込)証明書
- 大学成績証明書
- 在職中の勤務内容等を記載した書類(社会人のみ)……………本学所定様式4
- 住所シール

※出願書類については、入試広報課までお問い合わせください。

出願先

- 出願先 / 〒061-1449 北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1
北海道文教大学大学院 入試広報課
TEL. 0123-34-0160

※出願は郵送のみとし、書留速達で送付(締切日必着)

入学検定料及び納入方法

- 入学検定料 / 30,000円
- 納入方法 / 1) 銀行振込「電信扱」で納入してください。
2) 本学所定の入学志願書(必要事項を記入)に入学検定料を添えて、「電信扱」が利用できる金融機関(郵便局は不可)で手続きしてください。
3) 納入後、入学志願書(1、2、4票)の検定料領収印欄に金融機関領収印が押してあることを確認し、出願してください。ただし、4票(領収書)は“本人保管”なので提出する必要はありません。

選考方法

一般選抜、社会人選抜共に、筆記試験(英語、小論文)と口述試験により判定します。

- 英語: 60分(辞書持ち込み可、ただし電子辞書は不可)
ただし、社会人選抜で保育・教育及び発達支援分野の実務経験を有する受験者の「英語」の試験は、この分野に関する実践研究論文等で代替することができる。
- 小論文: 保育・教育・発達支援に関する内容(1,200字 60分)
- 口述試験: 提出された入学志願調査(志望理由書・研究計画書)に基づき実施します。

- ① 試験開始時刻 / 午前10時00分から
- ② 試験会場 / 北海道文教大学大学院(北海道恵庭市黄金中央5丁目196番地の1)

合格発表

本人宛速達郵便で、合格者には合格通知書及び入学手続き関連書類を、不合格者には不合格通知書を送付します。

※4研究科(グローバルコミュニケーション・健康栄養科学・リハビリテーション科学・こども発達学)の共通記入書類となります

様式1

受験番号
(記入不可)

研究計画書

ふりがな	
志願者名 氏名	

研究課題			
研究目的			
研究計画			
希望指導教員名		希望履修年	
志望理由			

- [記入要領] ◎ 研究計画書は、大学院在学期間中に取り組むべき研究課題とそれを遂行するための研究計画について記入します。大学院入学後は、この研究計画書に基づき、担当教員から履修上の指導を受けるときに使用します。
- ◎ 「研究課題」欄には、大学院在学期間中に取り組みたいと考えているテーマを具体的に記入してください。
- ◎ 「研究目的」欄には、研究テーマに沿って何をどこまで明らかにしたいかについて具体的に記入してください。
- ◎ 「研究計画」欄には、年次毎に研究をどこまで遂行するかについて具体的に記入してください。

様式2

受験番号
(記入不可)

履 歴 書

ふりがな		男・女	ローマ字
氏名			
生年月日	年 月 日生	本籍地	
現住所	□□□-□□□□	電話：() -	メールアドレス：
学 歴	年 月	高等学校卒業	
	年 月	大学	学部 学科卒業(見込)
	年 月		
	年 月		
	年 月		
職 歴	自 年 月 至 年 月		
	自 年 月 至 年 月		
	自 年 月 至 年 月		
	自 年 月 至 年 月		
	自 年 月 至 年 月		
勤務先 職 種			
特記事項			

※出願の際はその他提出しなければならない書類が研究科別に決められておりますので、各研究科で必要な出願書類は必ずご確認ください。